

## 韓国朝鮮語の学習

2019年5月19日

静岡県労働研究所 理事長（弁護士） 萩原 繁之

静岡県労働研究所は、昨2018年9月初旬に「韓国労働運動の調査と交流の旅」第2回（第1回は2009年8月に実施した。）として、ソウルに出向き、3泊4日の実りある旅をしてきた。

その旅の中身と成果は、中澤秀一所長、林克副理事長、鍋田敏子さん、長尾拓真さん、多田義幸事務局長らが、所報第35号に報告文を書いているほか、林副理事長などが様々な場で報告しているので、ここでは繰り返さない。

ここで書きたいのは、表題の通り、言語の学習のことである。

（ちなみに、これも表題の通り、私は、朝鮮半島の言語を韓国朝鮮語と呼ぶようにしている。近年は、韓国語と呼ぶ人が増えている様子があるが、朝鮮語と呼ぶ人も多い。厳密には、北朝鮮や、さらには中国の朝鮮民族の人々も使う言語で、韓国という名の国の人だけが使う言語ではないのだが、どうしても南北分断と対立の歴史的陰影があり、周知の通り、NHKは苦肉の策としてこの言語の語学講座を「ハングル講座」と、言語ではなく文字の呼び名にした。私独自のくふうとして、この際、「韓国語」とか「朝鮮語」とかどちらかの呼び方にするのではなく、くっつけてしまって「韓国朝鮮語」と呼ぶのが良いのではないかと考えた次第。もちろん呼び名が長くはなるが、それでも「ボスニア・ヘルツェゴビナ語」よりはだいぶ短い。不便ということはないだろう。）

今回の旅が実りあるものになったことについての、最大の功労者は、現在、龍谷大学の准教授になられた安周永さんであることは、参加者の一致して認めるところだと思う。安さんは、この旅全体のコーディネート、訪問先の皆さんとの対話についての通訳、などなど全般にわたって八面六臂の活躍をされた。相手方の言葉を十分に理解できる人は当方にも、先方にも、他にはいなかったから、今回の調査と交流は、安さん抜きでは、決して成り立ち得なかった。最後の最後でさすがにお疲れだったせいか、たった一度だけ、日本語で我々にご説明いただくべきところで韓国朝鮮語が口をついてでたということがあったが、その一度を除いて、極めて機敏、流ちょうに両言語を駆使して調査と交流を実に充実したものにしてくださった。

ここで立ち止まって考えるべきは、安さんの日本語能力の高さである。私自身を筆頭に、我々の世代の日本人は、勘違いしがちだと思うのだが、我々の子ども時代からの友人であった在日の方々は、日本で生まれ育ち、実質的には日本語が母語であるから、日本語を外国語として苦勞して学んだということはないだろう。僕には小学生時代から高校卒業までを共に過ごした無二の親友というべき在日の友人がいたが、二世であった彼は、一世であるご両親が稀に韓国朝鮮語で話し合っているのを聞いて、自分の親たちが何を話しているか、全くわからなかった、と打ち明けたことがある。その逆に日本語については我々と何ら変わらない能力を有していたのだ。

こうした友人を持つ者としては、安さんの高い日本語能力について、何ら感嘆に値することではないかのような錯覚に陥りがちである。

しかしながら、安さんは、そうではない。母国で生まれ育った安さんは、日本の研究を志し、外国語として日本語を学んだのだ。

安さんだけではない。静岡県労働研究所は、今年の春のシンポジウムでは金美珍さんを招いて韓国の労働運動の実情について、日本語で、学んだ。その講演の内容は、この所報に掲載されているはずだ。金美珍さんもまた、外国語として日本語を学び、高い語学力を身につけ、日本語で講義をしてくださっているのだ。

このところ、徴用工問題にかかる我が国の右翼政権の姿勢と、それに追随するマスコミの「大政翼賛会」的とすら思える報道姿勢により、日韓関係の異常な冷え込みが作られているようだが、実は、今や、韓国という国と人々から、我々日本人が学ぶべきことは非常に多いだろうと思う。

そういう状況下で、我々が、学習によって、安周永さんや金美珍さんの日本語能力に比肩できるほど、韓国朝鮮語の能力を身につけることができれば、ますます、学べることや、交流できることは、広がるのではなかろうか。「先ず隗より始めよ。」私自身が、還暦を過ぎたとはいえ、もっと勉強しないとイケないかな。